

令和7年度 第2回八戸市美術館運営協議会
会 議 録

日 時： 令和8年3月10日（火）10：00～12：00

場 所： 八戸市美術館 スタジオ

会 議 録

日 時： 令和8年3月10日（火）10：00～12：00

場 所： 八戸市美術館 スタジオ

出席者： 別紙のとおり

発言内容：

○事務局： 定刻になりましたので、只今から、令和7年度 第2回八戸市美術館運営協議会を開会いたします。まず始めに、お手元の資料の確認をお願いいたします。それぞれの資料の右上には順番に資料番号を振ってありますので、不足などがございましたらお申し出ください。それでは、会議に先立ちまして、事務局を代表して、観光文化スポーツ部次長兼観光課長の下村から挨拶を申し上げます。

○次長： 皆さん、おはようございます。本来であれば部長の工藤よりご挨拶申し上げますところですが、本日より3月議会、とりわけ予算特別委員会が始まるため出席がかなわず、代わりに私より一言ご挨拶申し上げます。はじめに、令和7年度の美術館の状況についてご報告いたします。浮世絵展を皮切りに、ポケモン×工芸展、さらには古代エジプト美術館展などを開催し、多くの来館者をお迎えしております。リニューアルオープン以降、過去最多の来館者数となる見込みであり、この点につきましては3月議会においても大変注目されているところでございます。開館から5年を迎えるにあたり、当館への理解も着実に深まってきていると感じております。また、昨年12月にはリニューアルオープン後の累計来館者数が50万人を達成し、利用状況は順調に推移しております。来月には、日比野克彦先生による展覧会「ひとり橋の上に立ってから、だれかと舟で繰り出すまで」が開幕予定であり、関連企画であるアートファーマーの募集にも40名を超える応募をいただくなど、高い関心が寄せられております。少し観光の取組について申し上げます。昨年5月に策定した「ハマる、ハチノへ。」観光振興プランに基づき、「食のまち八戸」、「文化観光の推進」に取り組んでおり、その一環として、アートと食を組み合わせたイベントの検討を進めております。また、美術館においても飲食営業の施設基準を満たす形でティールームの改修を予定しております。新年度には「食のまち宣言」を行い、アートと食を融合させ、五感で楽しめる八戸の魅力を発信してまいります。今後も第2期中期運営計画に基づき、ビジョンの実現に向けて様々な取組に挑戦してまいりますので、引き続き皆様のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

○事務局： ありがとうございます。次に本日の会議のご出席者の紹介でございますが、恐れ入りますが、紹介はお手元にお配りしている出席者名簿および席図を持って代えさせていただきます。三澤委員はオンラインでのご出席となります。また、伊藤委員、福田委員、吉川委員がご欠席でございます。次に、本会議は、八戸市美術館運営協議会規則第4条第2項により、委員の過半数が出席しているため、成立していることを報告します。また、会議後に作成した議事録は、発言者名を伏せてホームページなどで公開させていただきますので、よろしく申し上げます。そ

れでは、ここからの議事進行につきましては、日比野会長にお願いいたします。

◆会長： それでは、次第に従いまして進めさせていただきます。はじめに、(1) 報告事項①「第1期八戸市美術館中期評価報告書(全体期間)について」、事務局から説明をお願いします。

○事務局： 資料1についてご説明します。第1期八戸市美術館中期評価報告書につきましては、次期中期計画を策定するため、令和3年度から令和5年度までを評価対象としてとりまとめましたが、評価できていなかった令和6年度の事業について、評価を行い追記しました。資料全体につきましては、昨年3月に一度ご説明差し上げておりましたので、令和6年度追記分の主だった部分をご説明いたします。5ページからの「当館のこれまでの活動概要」ですが、令和3年度から実施してきた主な活動を掲載しています。10ページから17ページまでに令和6年度の事業、展覧会、学校連携、アートファーマープロジェクトなどを追加しております。続いて、21ページからは「主要な活動の評価」ですが、こちらは当館の主要な活動である、「展覧会+プロジェクト」、「学校連携」、「アートファーマープロジェクト」の3つについて、アウトプット指標、プロセス評価、アウトカム評価をした項目で、こちらにも令和6年度に実施した活動の評価を赤字追記しています。特に説明したい部分としては、26ページをご覧ください。展覧会事業によって起きた変化として、「風のなかを飛ぶ種子 青森の教育版画」の開催を通じて、他館や他大学の教育版画研究者が、当館において教育版画に関する研究会を開催したほか、会期終了後も八戸を訪れ、関係者へのインタビューを実施するなど、展覧会を契機として外部専門家との連携が深まった」、「展覧会をきっかけに、教育版画に関連する新たな資料の寄贈について打診を受けるなど、資料収集の面においても成果があった」、続いて、27ページですが、「八戸アーティストファイル2025」については、八戸地域の文化関係者や作家との関係構築につながった」、「出品作家には、その後の美術館主催ワークショップの講師を依頼するなど、地域文化の振興に向けた協力関係を継続している」ということが結果として起きました。続いて、37ページをご覧ください。こちらは、アートファーマープロジェクトによって起きた変化として、「建築ツアーガイド等の活動が、進路選択や将来設計を考えるうえで有意義な機会となっている」、「高校生の活躍が刺激となり、後輩など若い参加者の増加につながっている」を追記しています。43ページの総合評価については特に変更はございません。この中期評価報告書につきましては、今後美術館HPで公表いたします。資料1の説明は以上です。

◆会長： 中期評価報告書についてですが、事業計画の評価は18ページ、主要な活動の評価は21ページ、総合評価は43ページに記載しています。18ページから20ページにロジックモデルを掲載しています。入場者数など、評価が難しい指標もございますが、ロジックモデルを作成することで、それらを可視化しています。私から質問ですが、評価アドバイザーとして中村教授から助言を受けられたとのことですが、ロジックモデルを作成するにあたり、具体的にどのようなアドバイスを受けたのか教えてください。

- 事務局： 評価に関してアドバイザーをお願いした九州大学大学院の中村美亜教授からは、美術・芸術の分野においては数値的な評価が見えづらい側面があるため、数値については把握しつつも、それだけによらない評価が重要であるとの助言をいただきました。具体的には、市民の方々やプロジェクト参加者が、そこで何を感じ、何を考えたのか、またそれがどのような心の変化や行動の変化につながったのかといった点を捉えることが重要であるとのことでした。そのため、例えばアンケートの実施方法を工夫するなどして、多様に生じた変化を丁寧に把握していくことが必要であるとのアドバイスをいただいております。
- ◆会長： 他の委員の皆様、本評価についてご意見などはございますでしょうか。なお、後ほど最後にまとめてご発言いただく機会も設けておりますので、その際にご意見を頂戴しても差し支えございません。それでは、報告事項①につきましては、皆様にご了解いただいたものとして進めさせていただきます。続きまして、次の案件である報告事項②「令和7年度事業の実施状況について」、事務局よりご説明をお願いいたします。
- 事務局： 令和7年度事業の実施状況について、資料2-1をもとにご説明いたします。なお、昨年10月29日に第1回運営協議会を開催した際、それまでの対応についてはご説明済みであるため、本日はそれ以降に実施した内容についてご説明いたします。まず入館者数についてですが、2月28日までの実績で14万2,433人となっており、目標であった12万1,400人を現時点で達成しております。続いて開館からの累計は52万1,248人となり、昨年12月21日に50万人を達成いたしました。展覧会の開催状況については、11月以降の主なものとして「古代エジプト美術館展」を開催し、3万2,598人の来館がありました。なお、本展覧会は地震の影響により、予定より1週間早く閉幕いたしました。現在は、青森県出身のアーティストであるGOMA氏による「GOMA展 WONDER 不思議と驚きの奇跡」を開催しており、大変好評を得ております。来館者数の年齢別割合や居住地別割合については、後ほど別資料にてご説明いたします。次に、コレクションラボについてですが、渡辺貞一氏の展覧会を実施しております。ぜひご覧いただければと思います。また、その他の共催展示として、1月には帆風美術館と共催で「新春屏風展」を開催いたしました。さらに、八戸市小学校図画工作展を12月26日から28日まで開催しました。なお、11月以降も多数の事業を実施しており、当初は私から簡潔にご説明する予定でしたが、いずれも内容が充実しており、各学芸員の想いも込められた事業であるため、それぞれの担当者から説明させていただきます。
- 事務局： 3のアートファーマープロジェクトについて、ご説明いたします。(1)の建築ツアーガイドにつきましては、秋に新規メンバー第5期生を募集し、5名の方に参加いただきました。(2)の美術館広報部につきましては、年間を通じてアートファーマーの皆様が独自の視点と発想で美術館の活動を発信する活動となっております。月1回コミュニティラジオ BeFM でコーナーを設けて生放送に出演するほか、ウェブメディアのnoteでイベントやアーティストインタビューなどを発信しております。活動しているのは5名ですが、2月22日現在でラジオ出演やnote

の記事を9件投稿しており、月1～2回程度で発信を行っております。また(3)のものづくり部に関してですが、「エンジョイ!ぬり絵DAY」は、八戸工業大学第二高等学校の美術コースの生徒にアートファーマーとして参加してもらいながら、地元の作家の協力のもとオリジナルぬり絵の下絵を作成し、月に1回ぬり絵DAYを設けて、講師が参加者にアドバイスをしたり、絵を描いた後に花丸を付けたりしています。漆畑委員が始めていただいた活動をさらに広げて展開しており、高校生がなかなか美術館に来ていないという問題意識も踏まえ、美術コースの高校生に美術館に関わってもらえる機会や、地元アーティストに関わっていただく機会として実施しているものです。また、9月に実施したものとして、八戸出身で「八戸アーティストファイル2025」展に参加した加藤千晶氏とのかぎ針編みのワークショップを開催いたしました。こちらはかぎ針編みができる方という条件でアートファーマーを募集したのですが、津軽地方からも興味を持って参加された方がいらっしゃいました。次に③の「くにゆぎの森 魔法学校/くにゆぎの森 3D 冬・絶景」ですが、市内在住の少女板画家・イラストレーターであるしばやまいぬ氏がアートファーマーとともに、しばやまいぬ氏の版画の世界観を立体として表現するものです。青森5館連携のアートフェスに参加した際のプロジェクトを発展させたもので、第2弾となっております。1回目はしばやまいぬ氏が一人でペーパークラフトの虫を制作していましたが、1つつくるのに1～2時間かかるため、制作が追いつかない状況となり、それを見たアートファーマーが手伝っていました。今回は、アートファーマーが魔法学校の研究生という設定のもとチームメンバーとなり、冬休み期間中のイベント開催に向けて、6月以降、継続的に集まり活動を行ってまいりました。④の「アーティストプロジェクト」につきましては、現在ジャイアントルームに洋服のテントや衣服を吊り下げて展示していますが、装いの行為とコミュニケーションの関係性、ファッションスケープに着目した西尾美也氏とのアートプロジェクトを今年度より開始しております。内容を検討していたタイミングで12月8日の青森県東方沖地震が発生したことから、「地震の日の服」をテーマに活動を立ち上げました。現在は、声掛けにより集めた地震当日に着用していた服をエピソードとともに展示しているほか、ジャイアントルームの空間が避難所に似ていることから、もし避難所であればこのような洋服のテントがあると人の気配を感じられるのではないかと発想のもと、アートファーマーとともに制作を行っております。今後もプロジェクトを継続し、最終的には美術館で避難所体験ができるようにしたいと考えております。(4)の「日比野克彦 KAIKON プロジェクト」につきましては、令和8年度に実施予定の日比野氏の展覧会に合わせた取組であり、日比野氏の倉庫にあった作品をアートファーマーとともにジャイアントルームで開梱し、作品の調査を行うプロジェクトとして開始しております。多くのアートファーマーに参加いただいております。既にキックオフトークや作品を守る取組として活動を開始しております。最後に(5)の「館長クロストーク+アートファーマーミーティング」につきましては、青森県立美術館館長の平田オリザ氏と当館館長によるクロストークと、アートフ

アーサープロジェクトの1年間の活動を振り返る会を実施いたしました。

- 事務局： 5ページの(1)の学校連携事業についてご説明いたします。①の「学校連携プロジェクトチームの運営」についてですが、こちらは6年目となります。市内小中学校の図工・美術の先生と、美術館の学芸員および専門家で構成する学校連携プロジェクトチームを運営しております。今年度は当初19名で活動を開始しましたが、春に小学校から2名、また先日中学校からも1名ご参加いただきました。異動や退職により人数の増減はありますが、新たな先生の参加もあり、引き続き活動を継続している状況です。今年度は全体会議を1回開催し、その後1月に美術館新聞部として、小学生と高校生による活動を行いました。また、3月中には素材研究ラボとして、学校連携ラボを活用する事業を実施しております。素材研究ラボは3月中に4回開催予定で、30日には三澤委員も参加予定です。八戸ゆかりの食用菊やイカ墨などの素材を使った絵具づくりのワークショップを行い、美術館でのワークショップや学校授業のヒントとなることを目的としております。また、参加した先生方と令和8年度の学校連携事業について意見交換を行う予定です。②の「ドキット、そこには美術館」については、秋に開催したコレクションラボ011「きっとそこには」と連動した学校連携企画で、プロジェクトチームの先生3名とともに、児童生徒と鑑賞したい作品の選定から始め、鑑賞用ワークシートを作成しました。その後、所属校の児童生徒をバスで美術館に招待し、対話鑑賞やワークシートを活用した観覧を行いました。見学者数は191名、実施日数は7日間で、小学校2校と中学校1校が参加しました。③の「はみ出す力展の開催」については、昨年度に引き続き、「はみ出す力」をテーマに、全国の幼稚園・保育園・小中学校・高校・大学で行われた造形美術の授業を紹介する展覧会です。関連イベントとして、教員などを対象に、お酒を飲みながら鑑賞する「ほろハチ」を実施しました。④の「八戸工業大学第二高等学校の美術コースとの連携」については、学芸員による出張講義や美術館での対話鑑賞を行いました。また、令和8年度以降の実施に向けて、生徒が美術館で行うワークショップ案を作成し、先日発表していただきました。このワークショップ案は、高校側から地域と関わる授業を実施したいという提案を受けて取り組んだものです。⑤の「朝鑑賞の校内研修」については、希望のあった中学校に対し、学芸員とコーディネーターが向向き、教員向けに作品鑑賞の研修を実施しました。今年度は鮫中学校で実施し、3月18日には島守中学校でも実施予定です。いずれも過去に研修を行った学校ですが、1年間の実践を踏まえてのステップアップや、新たに異動してきた教員への説明を目的として実施しております。鮫中学校では実際に朝鑑賞は行っていないものの、対話を重視した授業づくりに取り組んでおり、朝鑑賞の手法を参考にしているとのこと。島守中学校では月1回のペースで朝鑑賞を実施しております。最後に⑥の「団体見学および職場体験の受入」については、希望のあった学校に対し、展覧会の解説や対話鑑賞を行い、美術館の案内を実施しました。職場体験では総合案内業務などを体験していただいております。受け入れ実績としては、団体見学が42件1,287名、職場体験が2件4名、マチナカまるっと一日体

験・一日館長が3名、スタッフ体験が15名となっております。

○事務局： 続きまして、(2)の「大学・高専連携事業」についてご説明いたします。本事業は、誰もが気軽に訪れることができる美術館の在り方を考えることを目的とし、美術とは異なる分野の教員を講師に迎えたイベントを開催するものでございます。八戸学院大学、八戸学院大学短期大学部、八戸工業大学、八戸工業高等専門学校教員の皆様にご協力いただき、多様な視点からの企画を実施しております。10月以降の主なイベントといたしましては、「流れの不思議と美の世界」と題し、船崎学長によるワークショップを開催いたしました。また、「光を通して模様を感じる～ステンドグラス風アート体験～」では、八戸学院大学短期大学部幼児保育学科の渡邊先生を講師に迎え、体験型のワークショップを実施いたしました。さらに、「親子でつくろ！新幹線」では、八戸学院地域連携研究センター長であり本協議会委員でもある福田先生を講師として、鉄道模型愛好家のご協力のもと、親子で新幹線模型を走らせたり紙工作を行ったりするワークショップを開催し、多くの参加者から好評を得ました。続きまして、②の「アートマネジメント事業」についてです。本事業は、芸術・文化活動と社会をつなぐための業務や方法論、システムについて学ぶ講座を開催し、学生と社会人が交流しながら課題や研究テーマについて議論する場を提供するものでございます。なお、本内容につきましては前回ご説明済みのため、詳細は割愛させていただきます。続きまして、③の「アート×幼児教育」の取組でございます。子育て世代が気軽に来館できる機会の創出と、学生の実践的な学びの場の提供を目的として、八戸学院まちなかラボを活用した事業を実施いたしました。託児サービスは、来館者の多い土日を中心に計6日間実施しております。また、「廃材で作ってあそぼう！」と題した「1パーク（わんぱーく）」では、小さなお子様とご家族が遊びを通じて創造的な活動に触れる機会を提供いたしました。八戸学院大学短期大学部の差波先生を講師に迎え、11月および12月に開催し、約60名の子どもたちが参加し、ジャイアントルームおよびスタジオにて活発な創作活動が行われました。さらに、「ベビーファーストデー」は、展覧会期間中に小さなお子様連れのご家族が安心して鑑賞できる機会として、今年度は2回開催いたしました。八戸学院大学短期大学部の加藤先生を指導教員として学生とともに運営し、11月10日および3月2日に実施いたしました。参加者数はそれぞれ4名および2名と多くはありませんでしたが、参加者からは来館しやすい環境であるとの評価をいただいております。続きまして、5の「コレクション（収集・管理）」についてですが、収集委員会は令和7年11月25日に開催し、新規収蔵作品は27点となりました。詳細につきましては後ほど館長よりご説明いたします。なお、収蔵品の修復は26点、撮影は100点実施しており、貸出はございませんでした。続きまして、6の「賑わい創出事業」でございます。「八戸えんぶり in 美術館」は2月18日に開催し、塩町えんぶり組の皆様約60名、うち子ども約40名にご参加いただきました。当日は来館者が約150名に達し、同時開催の漆畑委員が所属している東光会の勉強会と相まって大変賑わいのある催しとなりました。また、ゲームクリエイターのマーティー松橋氏に

よる「あそらぼ！ep4～マーティの創作パズル・ゲームワールド～」を3月19日から30日まで開催予定であり、現在は準備段階として制作過程を公開しながら進めております。キッチンカーにつきましても、主に平日を中心に不定期で出店いただき、広場の賑わい創出に寄与しております。続きまして、6の「共創パートナー」についてですが、「共に創る！アートのまちづくり魅力発見事業」では、八戸歴史文化発信事業実行委員会と連携し、美術館の共創パートナーを募集するとともに、文化芸術イベント情報の共有・発信を行っております。アートマップは年1回作成しており、今年度は掲載店舗が2店舗増加いたしました。また、公式LINEの登録者数は1,127人となっております。続きまして、7の「貸館利用」についてですが、市内外の個人・団体が、美術館の特性を活かして展覧会や各種活動を実施しており、交流の場の創出および集客に寄与しております。今年度は特別貸館として、「八戸工業大学第二高等学校美術コース作品展」を1月に開催いたしました。一般貸館は全部で117件ございまして、利用者は個人の方から各種団体、クラブ、行政を窓口としたもの、さらには各学校など多岐にわたっております。すべてをご説明すると長くなりますため、一例としてご紹介いたします。2月20日から22日まで開催された寄遠會展ですが、こちらは学校の先生方を中心とした書道クラブによる展示でございますが、開催にあたり、高専の学生が参加し、水を用いたタブレットで書を書くプログラムについて来場者へのアンケート調査を実施しておりました。この取組は世界的な賞を受賞しており、前回もご紹介させていただいたところですが、今年度も引き続き学生が参加しておりました。また、これに加え茶道部による取組も行われております。前回は市外の三本木高校茶道部が参加し、書道展に合わせてジャイアントルームでお茶会を開催しておりましたが、今年度は主催者側の呼びかけにより、八戸聖ウルスラ学院高等学校の茶道部が参加し、お点前を披露いたしました。これにより、学校間の茶道部同士の新たな交流が生まれております。さらに、寄遠會展の展示においては、当初は先生方のみの作品展示でありましたが、別団体に所属する方の作品も併せて展示されておりました。これについて確認したところ、美術館をきっかけに知り合った団体同士が、交流を深める目的で参加を呼びかけたものであり、こうした取組を通じて団体間の新たなつながりが生まれているとのことでございました。このような事例からも、美術館内における交流の広がりを実感したところでございます。また、関係者の先生からは、「この美術館ができたことで交流が非常にしやすくなった。ジャイアントルームで開催されている様々な分野のイベント参加者と自然に会話が生まれ、知り合いとなり、ネットワークが広がっている」とのお話をいただいております。本施設ならではの魅力であるとの評価をいただき、大変印象的でした。私自身もこのお話を伺い、大変嬉しく感じるとともに、本美術館が人と人をつなぐ場として機能していることを改めて認識いたしました。以上、少しお時間をいただきましたが、事例としてご紹介させていただきました。続きまして、8の「学校団体見学・視察・団体旅行ツアー受入れ状況」についてですが、学校団体見学は1,287人、視察は198人、団体旅行ツアーは767人

でございました。最後に、資料2-2「第2期八戸市美術館中期運営計画目標値に対する達成状況」についてご説明いたします。各取組に対する目標値と令和7年度実績（2月28日現在）を一覧で示しておりますが、全体として目標は概ね達成しております。広報・情報発信については既に目標を上回る項目も見られます。また、学校連携事業について、学校連携数の目標が年5校程度としており、実績は3校となっておりますが、学校団体見学受入数は目標25校に対し42校と大きく上回っており、総合的に達成しているものと認識しております。以上で、資料1および資料2の説明を終わります。

○事務局：資料2-3に基づき、令和7年度来館者動向報告概要版についてご説明いたします。1の「開館日数・来館者数データ」につきましては記載のとおりです。開館日数は、3月末時点で307日を予定しております。なお、令和7年12月8日に発生した青森県東方沖の地震の影響により、12月10日および11日の2日間は臨時休館とし、館内の破損状況などの確認を行いました。続いて、(1)の「来館者数」につきましては、2月末現在で142,433人となっております。再開館以降、過去最高の来館者数となっております。(2)の「来館者数測定方法」については、入口に設置している自動計数カウンターのほか、総合案内においてチケット購入者やミュージアムグッズ購入者に対し、居住地などの属性を確認し、把握しております。続いて、2の「各種割引・チケットシステムの導入」についてですが、当館主催および実行委員会主催の展覧会において、期間中何度でも観覧可能なおパスの導入のほか、駐車場割引、65歳以上のシニア割引、障がい者割引を実施しております。3の「観覧者の居住地別割合」につきましては、総合案内で把握したデータを基に算出しております。市民が約50%、県外が23.6%、県内（市外）が15.2%、外国人が4.5%となっております。続いて、4の「観覧者の年齢別割合」につきましては、主にチケット販売データを基に把握しております。一般（20歳から65歳程度）が64.4%で、前年度の58.5%から増加しております。未就学児から中学生までの割合は5.1%で、前年度の14.9%から大きく減少しております。これは、対象となった展覧会が浮世絵展であったことから、成人層の来館が多く、子どもの来館が少なかったためと考えられます。続いて、5の「割引券利用の割合」につきましては、浮世絵展を対象に分析したものであり、駐車場割引の利用が31.3%と最も多く、次いで65歳以上のシニア割引が17.8%となっております。資料2-3の説明は以上でございます。続きまして、資料2-4に基づき、「令和7年度アンケート結果概要版」についてご説明いたします。アンケートにつきましては、総合案内付近に用紙を設置し、展覧会の満足度について調査を行っております。回答者数は、2月末現在で803件となっております。回答者の属性につきましては、性別は男性が約4割、女性が約6割となっております。年齢層は全世代にわたり幅広く分布しております。居住地については、市内と県内が3割弱、県外が5割弱となっております。来館回数につきましては、初めての来館が約6割、2～3回が約2割、4回以上が2割弱となっております。2ページをご覧ください。来館動機については、「企画展を見るため」「美術に興味・関心があるため」「美術

館の建物・建築に興味があったため」といった回答が多く見られました。また、今後見たい展示内容については、「漫画・アニメ」「現代アート」などの回答が多く、幅広いジャンルへのニーズが確認されております。(3)の「展覧会満足度」については、4つの展覧会において、「とても満足」および「満足」を合わせた割合が90%以上となっております。また、コレクションラボについても、同様の満足度が80%以上となっております。(5)の「中心市街地への波及効果」については、来館時に中心街の施設やサービスを利用した来館者は67.7%となっております。具体的には、商業施設や公共施設の利用が確認されており、中心市街地内での回遊が見られます。また、宿泊を伴った来館者は8.7%となっており、当館の展覧会を契機とした宿泊需要の創出も一定程度見られます。当館は中心市街地に立地していることから、今後も周辺施設と連携し、中心市街地の活性化に寄与してまいりたいと考えております。資料2-4の説明は以上でございます。

○事務局：

資料2-5の「令和7年度アートファーマーアンケート」について報告いたします。回答者数は15名で、昨年度と同数でございます。なお、本アンケート実施時点では、日比野氏および西尾氏のプロジェクトがまだ開始されていなかったため、それ以外のプロジェクトに参加したパートナーを対象として実施しております。まず、設問2の「回答者の属性」についてですが、グラフに示しておりますとおり、今年度は10代の参加者が多い結果となりました。これは、「建築ツアーガイド」や「エンジョイ！ぬり絵DAY」において高校生の参加が多かったことによるものです。続いて、「どのようなことを期待してプロジェクトに参加しましたか」という設問については、主に三つの動機が見られました。一つ目は、「自分の興味関心がある、経験を積みたい」というものです。二つ目は、「美術、美術館、学芸員に関心がある」といった将来志向の動機であり、特に高校生に多く見られました。三つ目は、「美術館の魅力を伝えたい、役に立ちたい」といった社会貢献的な意識での参加であり、広報活動に関わるアートファーマーの方々に多く見受けられました。次に、「プロジェクトに参加した感想」のうち、「地域に対する新たな発見がありましたか」という設問についてですが、八戸市美術館の活動や地域との関わりについて、従来のイメージが変わったという意見が多く見られました。具体的には、美術館に対する認識が改まったという声や、建築ツアーガイドの一環として青森県立美術館を見学した経験を通じて、八戸に限らず青森県全体が美術・アートの分野において恵まれた地域であると再認識したという意見がございました。また、「ぬり絵DAY」に参加した高校生からは、「想像以上に多くの来場者が関心を持って参加してくれたことに驚いた」という率直な感想も寄せられております。続いて、「能動的な学びの機会となりましたか」という設問についてですが、来館者への説明や企画内容の案内など、コミュニケーションの機会が多いことから、「伝える力やコミュニケーション能力を学んだ」とする回答が多く見られました。そのほか、「作品の感じ方は人それぞれであることを理解した」、「多様な視点を受け入れるようになった」、「美術館の役割や地域文化への理解が深まった」といった意見もございました。また、「来館者に合わせて説明することの大切さに

気づいた」「ぬり絵は誰でも身近に楽しめるアートであると感じた」といった具体的な学びも挙げられております。5ページの設問「2025年度のプロジェクトに参加したことによる自身の変化」についてですが、全体として、「参加によって良い変化があった」と回答した方が大多数を占めております。特に気持ちの面では、「人とのつながりを感じた」、「新しいことに挑戦する意欲がわいた」といった回答が多く見られました。続いて「行動の変化」については、「社会や文化の多様性について考えるようになった」とする回答が多く寄せられております。最後に、7ページ(3)「あなたにとってアートファーマープロジェクトはどのようなものですか」という設問については、「学校では学べないことを学べる活動」、「学校以外のもうひとつの居場所、部活動」、「八戸や人との繋がり、自分の世界や将来に対する考えを発見させて実らせてくれる大きな木」など、アートを通じて学びや交流を得ることで日常に刺激をもたらす活動であるというような認識が見られたほか、学校や仕事とは異なる学びの場、地域の人とつながりを生む場として捉えている方が多くいました。なお、アンケート結果には直接記載されておませんが、印象的なエピソードがあります。参加者の中には高校生から80代の方まで幅広い年齢層がいますが、その中で、最高齢の方は建築ツアーガイドに所属している方で、ご自身で積極的にガイドを行うというよりは、その場に関わることで自体に意義を見出して参加されているとのことでした。その方からは「同年代の多くがデイサービスに通う中で、自分にとってはこの美術館が私にとってのデイサービスである」とのお話してくれました。来館するたびに展示や活動が変わり、多様な人と出会えること、また自分自身が社会とのつながりの中にいると実感できることに大きな満足感を得ているとのこと、大変印象的でした。以上の結果から、本プロジェクトは参加者が主体的に学び、地域文化と関わる実践の場として機能していることが読み取れます。なお、設問内容は昨年度と同様のものを使用しておりますが、今後は中期計画のミッションに沿った内容へ見直しを図りつつ、継続的に調査を実施してまいりたいと考えております。以上で報告を終わります。

◆会長： 資料2について、各担当から報告していただきました。時間が限られてきていますので、この後の報告事項も含めて、委員の皆様からのご意見は後ほどまとめていただく形をお願いいたします。続いて、協議事項①「令和8年度事業計画(案)について」、事務局から説明をお願いします。

○事務局： それでは、資料3-1に基づき、令和8年度八戸市美術館運営事業についてご説明いたします。なお、資料3-1から資料3-3につきましては各担当より説明し、資料番号のない参考資料につきましては、後ほど佐藤館長より説明いたします。まず、資料3-1をご覧ください。1の「事業概要」につきましては、従来どおり、出会いと学びのアートファームをコンセプトに運営してまいります。続いて、2の「令和8年度の主な事業内容について」ご説明いたします。現在、市議会において令和8年度当初予算の審議中であることから、本日は予算要求段階の内容についてご説明いたします。(1)の「美術館の企画運営」については、予算額は

5,060万7千円となっております。企画展、巡回展、コレクションラボの開催のほか、各種プロジェクトを展開する内容となっております、詳細は資料記載のとおりです。(2)の「美術品の収集・保管等」については、予算額は1,435万4千円となっております。美術作品の収集および収蔵品の適正管理、調査を行うものであり、令和8年度の新規事業として研究紀要の作成を予定していることから、当該経費を計上しております。(3)の「施設の維持管理」については、予算額は1億7,640万円となっております。展示室や収蔵庫の環境を適切に維持するとともに、施設全体の維持管理を行うものであり、光熱水費、清掃費、警備業務委託費を含んでおります。また、修繕料として、令和8年度はティールームの改修を予定しております。シンクや手洗い設備の追加を行い、営業許可取得に必要な設備基準を満たす内容となっております。(4)の「美術館の管理運営」については、予算額は4,008万3千円となっております。日常的な施設管理および保守管理業務に係る経費を計上しております。資料3-1の説明は以上でございます。続きまして、資料3-2につきましても、企画運営グループよりご説明いたします。

○事務局： 続いて、資料3-2「令和8年度八戸市美術館展覧会事業について」ですが、令和8年度の展覧会については、先ほど何度かお話しに出ている日比野会長の展覧会を4月から9月までの会期で開催予定です。また、人気絵本作家のヨシタケシンスケ氏の巡回展や、地元作家・昆野清一氏の回顧展も予定しております。各展覧会の詳細については、担当学芸員からご説明いたします。

○事務局： 4月18日から9月23日にかけて、日比野克彦氏の大規模個展「日比野克彦 ひとり橋の上に立ってから、だれかと舟で繰り出すまで」を開催いたします。こちらは、令和7年7月に水戸芸術館で開催された展覧会を巡回するような形で行います。また当館独自の企画として、ジャイアントルームの大空間を生かし、日比野氏が岐阜のご自身の倉庫に保管している作品、4トントラック2台分を当館に持ってきてアートファーマーとともにそれらの作品を開きながら大規模な調査を行うという「日比野克彦 KAICONプロジェクト」も併せて開催いたします。

○事務局： 巡回展「ヨシタケシンスケ展かもしれない」についてですが、本展は、青森朝日放送と共同で企画し、実行委員会形式により開催する予定としております。子どもから大人まで幅広い世代に支持されている絵本作家・ヨシタケシンスケ氏の初の大規模個展であり、これまで全国各地で開催され、累計来場者数は100万人を超えております。また、直近では秋田での開催において約4万人の来場があったと伺っており、本市におきましても多くの来館者が見込まれる展示であると考えております。

○事務局： 企画展「昆野清一 遡源画卷 かなしみの河を遡る」です。こちらは八戸に生まれた昆野清一氏の個展を共創パートナーとして八戸の画材屋である八戸彩画堂との共催企画として実施するものでございます。昆野氏は、戦争体験している画家ですけれども、その際に抱いた悲しみをとても長い作品にしたための作家です。ただなかなか公開するということを彼自身できずにライフワークのような形で描いていった全360mとなる大きな作品があるのですが、これを一挙に展示するとい

う展覧会になっております。

- 事務局： 第63回八戸市美術展ですが、市の文化協会との共催で全館使って、市民の方々が創作した書道や絵画、写真など500点ほどを展示いたします。会員を中心とする展示に加えまして、広く市民や若手アーティスト、学生などの作品発表の場として提供したいと考えております。会期は、前期は書道となりますが、10月中旬の3日間、その後、後期は絵画、写真を同じ3日間で開催いたします。
- 事務局： ⑤のコレクションラボ013「ここにある理由 新収蔵作品展」については、3月28日から7月20日までの会期です。令和7年度の新収蔵作品が収蔵された理由をたどり、八戸市美術館と地域の関わりに注目して、展示を開催したいと考えております。
- 事務局： コレクションラボ014「岡山良一 八戸モダンの風」については、モダンアート協会会員に所属していた画家で、デザイン・建築など、多様な分野で八戸を牽引した岡山良一氏を紹介するものになっております。
- 事務局： コレクションラボ015「馬カケル」については、古くからの馬産地である八戸の文化を、郷土の画家が描く馬の姿を通して紹介する展覧会となっております。
- 事務局： 資料3-3についてご説明いたします。令和8年度八戸市美術館各事業についてですが、展覧会以外の事業について、学校連携による各事業、アートファーマープロジェクト、アクセシビリティを高めるプロジェクトや共創パートナーの関連事業を実施することにしております。
- 事務局： 学校連携事業については、今年度と同様に、引き続き学校連携全体の取組および学校連携プロジェクトの運営を行ってまいります。「はみ出す力展」につきましても、これまで2年間開催しており、来年度で3回目の実施となります。これにあたり、学校連携プロジェクトチームに参加されている先生方へ展覧会への出展を呼びかけるとともに、特に市内の先生方への周知が十分ではないと感じていることから、広報・周知の強化にも取り組んでまいりたいと考えております。また、学校連携プロジェクトチームの活動については、現在、学校連携ラボにおいて「素材研究ラボ」といったワークショップを実施しているところでございますが、こうしたラボの機能を活用しながら、来年度の取組内容について先生方へのアンケートや意見交換を通じてアイデアの収集を進めております。現時点では、「大きな作品制作に取り組みたい」「八戸のまちを探検し、地域に関する素材を見つけたい」「海外との交流を行いたい」といった多様な提案が寄せられております。今後はこれらのアイデアについて、先生方と協議を重ねながら具体化を図り、学校連携ラボを活用したプロジェクトとして展開していく予定です。引き続き、学校連携プロジェクトチームの活動を充実させながら、来年度も継続的に事業を実施してまいりたいと考えております。
- 事務局： 2(2)の大学・高専連携事業についてですが、本事業につきましては、引き続き八戸学院大学、八戸工業大学、八戸工業高等専門学校のご協力をいただきながら実施してまいります。大学資源を活用したアートの学び事業では、市内の大学・高専が有する専門性と、美術館が担うアートの専門性を掛け合わせることで、

人材育成および地域活性化につなげる取組を推進してまいります。令和8年度におきましては、分野横断型のアートセミナーの開催や、多世代が共に学び合う講座の実施、さらに幼児教育とアートを組み合わせた取組などを展開し、美術館を活用した新たな学びの場の創出に努めてまいります。

○事務局：アートファーマープロジェクトの来年度の活動についてですが、基本的には、今年度実施している各プロジェクトを継続していく方針としております。西尾美也氏によるアーティストプロジェクトにつきましても、今後2年程度を見据え、引き続き実施していく予定です。また、ものづくり部においては、「エンジョイ！ぬり絵DAY」を引き続き発展的に開催していくとともに、「ものづくり工作室」では、先ほどご紹介した版画の世界観を立体的に展開する「くにゆぎの森3D」プロジェクトについて、シーズン3の実施を検討してまいります。こちらにつきましても、アートファーマーやアーティストからも継続を望む声が寄せられています。続きまして、美術館のアクセシビリティ向上に関する取組についてでございます。今年度は、手話通訳者を配置したギャラリートツアーを実施いたしました。来年度につきましても、展覧会ごとに1回程度の実施を目指してまいります。あわせて、英語通訳者を招いた多言語対応のガイドツアーについても検討を進めてまいります。

○事務局：続いて、研究紀要についてご説明いたします。1986年の開館以来初めての発行となるものであり、第1号については印刷物として作成し、関係各所への配布を予定しております。掲載内容の詳細については現在検討中ですが、昨年度実施した教育版画に関する調査内容や、コレクションラボに関連した調査研究を中心に掲載していくことを想定しております。

○事務局：6の「共創パートナー」につきましても、今年度に引き続き、八戸クリニック街かどミュージアムと連携しながら取組を進めてまいります。実施内容も、公式LINEアカウントヨッテミッテによるイベント情報発信、はちのへヒストリアとの連携、街なかアートマップの制作、パートナーミーティングの開催を予定しています。資料3-3の説明は以上です。

○館長：先ほどもお話ししましたが、中期評価報告書において、ロジックモデルを作成し、第2期中期運営計画として「地域文化を次世代へ継承する」「クリエイティブな人が増える」「地域の社会的包摂を推進する」というミッションを設定しています。それに基づいて、一つのトピックとして音楽インスタレーションの収蔵が挙げられます。プロジェクトという形のない活動をどのように美術館で収蔵、つまりコレクションに結びつけるかを考える中で、一例として、2023年に行われた「美しいHUG！」展では、音楽家の井川丹氏が「虹の上を飛ぶ船」という版画作品を基に音楽インスタレーションを制作し、それを収蔵する可能性について探りました。その結果、昨年11月に開催された美術品等収集委員会でこの音楽インスタレーションの収蔵が決定し、今月末から行われる新収蔵作品展でも展示されます。このように、音楽インスタレーションを収蔵するという新しいモデルケースができたことは、大きな成果だと考えています。今後、将来的なコレクションに向けて、

どのように購入し、コレクションを拡充していくのかについては、まだ検討が必要ですが、八戸のコレクションを形成するためのリスト作成準備も進めています。地域文化の継承については、以前「八戸アーティストファイル 2025」という展覧会を開催しましたが、その際に出展していた加藤千晶氏が、上野で毎年行われるVOCA展に推薦され、VOCA佳作賞を受賞しました。このように展覧会から新たな成果が生まれ、今月から上野の森美術館で展示されることとなります。展覧会がきっかけとなり、加藤氏が賞を受賞したことは大きな成果の一つだと考えています。次に「クリエイティブな人が増える」という点についてですが、先ほどもアートファーマープロジェクトで説明したように、美術館広報部は非常に活発に活動しています。例えば、BeFMというコミュニティラジオに出演して、定期的に美術館の活動を紹介する番組を持っていたり、アートファーマーたちが自主的に「note」というウェブメディアに記事を書いたりしています。本来であれば学芸員がこうした活動を紹介する記事を執筆すべきですが、時間的余裕がない中で、アートファーマーたちが自ら発信を行っています。また、日比野会長の「KAIKONプロジェクト」では、多様な人々が集まる機会がつけられています。最後に「地域の社会的包摂を推進する」という点についてですが、託児ルームなどのサービスは通常通り提供しており、美術館の主催ではありませんが、今展示されている「GOMA展」では触れる作品の展示や、高等支援学校との共同制作など、社会的包摂を意識した取組が行われています。今後もこのような新しい試みを積極的に試みていく予定です。

- ◆会長： 説明ありがとうございました。協議事項について説明いただきました。各委員から報告事項と協議事項含めて何かご質問ご意見などいただければと思います。
- ◆委員： 大変多様な活動体として、このアートファームが発展してきていると感じており、まずその点は非常に素晴らしいことだと思いました。各学芸員の創意工夫に加え、地域の方々との多様な接点を広げている点についても、大変望ましい方向性であると評価しております。そのうえで、いくつか意見を述べさせていただきます。まず、アンケート結果から読み取れる点と、読み取りきれない点があるように感じました。特に、希望する展覧会として現代アートが高い関心を示している点は興味深く、それに応える形での日比野会長の展覧会が企画されたのかなと思いました。漫画やアニメといった分野についても関心が高く、現在注目されている作品や潮流を踏まえた展開は、集客面においても大きな可能性を持つと考えられます。絵本やデザインも比較的高い関心を示していることから、これらを活かした企画についても検討の余地があるのではないのでしょうか。次に、事業計画における予算についてです。予算要求には一定の戦略があることは理解しておりますが、現状の資料からは、事業ごとの費用規模がやや把握しにくい印象を受けました。例えば、委託料や人件費といった項目別ではなく、事業単位での費用のまとまりが示されると、各事業にどの程度の資源が投入されているのかがより明確になると思います。具体的には、企画展や賑わい創出事業、アートのまちづくり魅力発見事業などについて、それぞれの予算配分の内訳や割合が示されると、より理解

が深まりますし、市への予算要求においても戦略的な説明が可能になるのではないのでしょうか。次に、館長からも言及があった音楽コレクションについてです。他ジャンルとのクロスオーバー企画は非常に重要であり、積極的に展開していくべきだと考えます。特にジャイアントルームはそのような取組に適した空間であり、多様な表現活動の可能性を広げる場として活用できると思われれます。従来の美術やファインアートの枠にとどまらず、音楽をはじめ、場合によってはスポーツなど他分野との融合を図ることで、新たな価値創出につながるのではないのでしょうか。そうした視点から、分野横断的な企画を検討するためのアイデア会議のような場を設けてみてはどうかと考えております。

◆委員： 様々な報告をお聞きしての感想ですが、展覧会とプロジェクトの二本立てで運営していくという枠組みが、当初はやや分かりにくい印象もあったものの、最近では整理されてきており、しっかりと根を張って成長してきているのではないかという印象を持っています。また、当初掲げられていたコンセプトである「人を育てる」という方向性が、より明確になってきているようにも感じました。その上で、私から一点お伺いしたいのですが、先日12月に大きな地震があり、開館以来初めての災害対応であったかと思えます。今回は夜間の発生でしたが、仮に日中に発生した場合にどのように対応されるのか、といった点についてどのようにお考えなのかお聞かせいただければと思います。また、「古代エジプト美術館」展が途中で終了となった際には、SNS上で情報が独り歩きしているような状況も見受けられましたが、こうした情報発信の課題についてどのように整理し、対応していくお考えかについても併せてお聞かせいただければと思います。災害時の対応や情報発信の在り方について、今後の考え方を簡単にお聞かせいただけますと幸いです。

○事務局： 災害時の対応については、大きく二つあると考えております。まず一つ目は、作品の保護についてです。現在、コレクションラボでは作品を金具に引っ掛けて展示しておりますが、それに加えて、揺れた際にも落下しないようなストッパーの設置など、大きな地震を想定した対策を進めているところです。今回の地震においても作品の落下はありませんでしたが、引き続き対策を強化していきたいと考えております。また、「古代エジプト美術館」展については、主催が民間会社であり、そちらで地震保険に加入していたことから、修繕にかかる費用については対応が可能であったと聞いております。この点を踏まえ、市としても、外部主催の展覧会を実施する際には、契約段階において地震保険の加入状況をしっかり確認する必要があると、改めて認識したところです。もう一つは、来館者の安全確保、いわゆる人的被害への対応です。混雑している展覧会の最中に地震が発生する可能性もあることから、日頃より避難訓練は実施しておりますが、今回の経験を踏まえ、マニュアルの整備や見直し、そして館内における各職員の具体的な役割についても再確認する必要があると感じております。今後は、こうした点を踏まえ、対応の徹底を図りながら、災害時の体制強化に取り組んでいきたいと考えております。

○館長： あともう一点、SNS に関する対応についてですが、現時点では、事実と異なる情報が発信された場合であっても、それに対して公式に何らかの発信を行うという対応まではしておりません。ただし、今回の件も踏まえたと、今後はそのような情報発信に関する危機管理の在り方についても、検討していく必要があると考えております。

◆委員： 八戸市美術館が開館以来取り組んでこられた、「人と出会い、体験を積み重ねていく」という活動が、市民の中にも着実に根付いてきているというお話を伺い、大変嬉しく思っております。また、学校連携についてですが、田村学芸員のサポートのもと、先日から素材研究ラボをスタートすることができ、非常に楽しみにしている活動の一つとなっています。学校の授業にもすぐに活かすことができる内容であり、日常的に継続できる活動でもありますので、ぜひ令和8年度も継続的に取り組んでいければと思っております。今後のお願いになりますが、田村学芸員からも周知に力を入れていきたいというお話がありましたので、ぜひその点はお願ひしたいと考えております。現在、学校現場では行事の精選が進んでおり、外に出る機会についても選んでいくという傾向が出てきています。教員の負担軽減という背景もありますが、その一方で、小学生から高校生までが学校の外に出てさまざまな体験を積むことは非常に重要だと感じています。そうした体験があるからこそ、日々の学習にも前向きに取り組む意欲につながるのではないかと思います。特に、芸術に触れる機会というのは大変貴重ですので、その意義について多くの先生方に理解していただけるよう、学校連携の取組についても積極的に発信していくことが大切ではないかと感じております。私自身、美術館によく足を運んでいると、「楽しそうだけれど大変ではないか」と聞かれることもありますが、実際にはここで得た学びを授業に活かすことで、結果として授業を円滑に進めることにもつながっていると感じています。こうした実感も含めて、企画内容だけでなく、実際にプロジェクトに参加している教員や来館者の声なども発信していけると、より多くの方に魅力が伝わるのではないかと思います。次年度もどうぞよろしくお願いいたします。

◆委員： 本日は二点ほどお話しさせていただきます。まず一つ目は、「はみ出す力展」についてです。こちらは埼玉県の間工美術の先生方が企画した内容を、八戸で展示するという、一風変わった展覧会です。予算面では、八戸市美術館がパネル制作費や広報費を負担し、共同開催のような形で展開しております。美術教育に関する内容を、県を越えたコラボレーションによって、学校現場に新たな刺激を生み出す点が大きな魅力であり、美術館がその媒介となって新しい風を呼び込んでいると感じております。農業に例えるならば、風を吹かせることで作物の成長を促すような役割を果たしているのではないのでしょうか。こうした取組は、今後も継続していきたいと考えております。次に、「朝鑑賞」の取組についてです。今年度は鳥取県の美術館において第2回シンポジウムが開催されました。本年6月27日には、長野県東御市にてシンポジウムが開催予定であり、文化庁の次長にもご講演いただくこととなっております。長野県では、県全体で朝鑑賞を導入しようとい

う動きが始まっており、大変意義深い取組だと感じております。美術に関心の薄い子どもたちにも、日常的に作品に触れる機会を提供できる点が大きな特徴です。八戸市内においても、鮫中学校や島守中学校などで徐々に取組が広がっており、今後さらに発展していくと、2年後、3年後には、八戸市美術館でシンポジウムを開催し、全国から関心のある方々や美術館関係者にお集まりいただくような展開も可能ではないかと考えております。いずれにいたしましても、これらの取組は農業に例えると、日々の地道な積み重ねが重要であると考えております。毎年種を蒔き、手入れをし、収穫を重ねることを繰り返し、長い年月をかけて大きな成果につなげていくことが大切です。100年後に豊かな実りとなるよう、着実に歩みを進めていければと思っております。最後に、美術館関係者の皆様が日々尽力されていることに、心より敬意を表するとともに、感謝申し上げます。

◆委員：

前回のこの会議でも申し上げましたが、一般的に美術館は、作品を静かに眺める場所という認識があるかと思いますが、八戸市美術館には、そこからさらに一步、二歩踏み込んで、人のぬくもりがあちこちに感じられるような場所であり続けてほしいと願っています。名作を見に来たり、SNS 映えする写真を撮ったりするだけでなく、「誰かとつながりたい」と感じるような体験ができる場所として、世界中から人が訪れる美術館になっていって欲しいと思います。その「ぬくもり」の基盤となるのは、人と人との関係づくりだと思います。ひとつの美術作品や展覧会を通して、さまざまな関係を生み出していこうとする努力が丁寧に紡がれていることを感じ、とても頼もしく思いました。関わり方や参加の形を多様化し、市内外のさまざまな人とのつながりを広げ、増やしていく。そして関係性を育てていくことこそが、このアートファーマーの大きな目的であるはずだと、準備委員会の頃から感じており、今もその想いは変わりません。その意味で、開館から5年目を迎えて、まさに種蒔きができたような印象を本日改めて強く持ちました。これからは丁寧に水をやり、時間をかけて芽が出て、どのような花が咲くのかを見守っていく段階なのだと思います。一つ一つの関係づくりは、たいして関係人口も多くないので、現場で尽力されている皆さんの中には、「今この取組を続けていて本当に大丈夫だろうか」と不安を感じる瞬間もあるかもしれません。しかし、それらを積み重ねていくことで、10年、15年と時間が経ったときに、大きな財産となり、さまざまな場所で花開いていくのだと思います。それこそがアートプロジェクトの持つ力だと、最近痛感しています。将来的には、「ぜひ一緒に取り組みませんか」と各地から声がかかるような存在となり、開館 20 周年を迎える頃には、そのような広がりを実現しているのではないかという期待を強く抱きました。美術館は、単に作品を調査研究し展示する場所にとどまるのではなく、そこから新たな関係や活動を生み出していく場所でもあります。そして、一つの文化施設が、社会のさまざまな人々にとって多様な形で活用される場になり得ることを示していくことが、いわゆる「第4世代の美術館」の目指す方向ではないかと思っております。また、これは東京藝術大学で近年設立されたキュレーション教育研究センターが提唱している「キュレーション」という概念とも重なる、新しい実践の一

例ではないでしょうか。従来のホワイトキューブの空間の中で、作品をどのように展示・編集するかというだけではなく、地域社会や人との関係性までを含めて考える。その結果として、キュレーションとマネジメントの境界が徐々になくなりつつあるように感じています。ぜひ、美術史的な研究成果を発信するだけでなく、こうした実践の蓄積についても研究紀要などの形で言語化し、記録として残していただければと思います。また、今年も県内5館の連携事業が予定されているようですが、個人的には企画面での連携だけでなく、別の形の取組も考えられるのではないかと考えています。例えば、夏の良い季節に青森県内の建築的にも個性的な美術館を巡ることができるよう、移動手段を整備し、2泊3日や3泊4日といった滞在型のプランを提案するなど、行政側が主体となった連携の方が、学芸員同士の連携以上に実りあるものになる可能性もあるのではないのでしょうか。その中で、今回のようなアンケート評価の結果を5館で比較し、それぞれの美術館がどのような来館者を惹きつけているのか、その違いを分析・認識するような取組も、現場の皆さんのモチベーション向上につながるのではないかと考えています。私は美術館の専門家ではありませんので見当違いの点があるかもしれませんが、将来的には全国の似た性格を持つ美術館と比較評価を行うなど、次の評価の段階ではそうした手法を取り入れてみるのも興味深いのではないかと考えました。

◆委員：

運営計画を拝見しますと、学校連携や大学・高専などの高等教育機関との連携、行政や企業との連携、さらには賑わい創出事業による地域への波及、アートファーマープロジェクトを通じた市民との連携など、現在美術館に求められている役割を幅広く網羅して取り組まれていると感じております。その中で、単に多様な要請に応えるだけでなく、明確なミッションのもとで事業を展開し、限られた人員体制の中で着実に成果を上げておられる点については、本当に素晴らしいと感じております。特に、乳幼児や家族連れ、高校生といった多様な来館者層をどのように受け入れ、来館につなげていくかという点については、他館でも大きな課題となっているところであり、非常に先進的な取組であると感じております。先日、館長同士のクロストークを行った際にも、当館の平田館長がまさに同様の課題を挙げておられて、その点でも大変意義のある取組だと感じました。一方で、目標値に対する達成状況を数値で管理することは重要ではありますが、行政評価の仕組みの中では、達成が続くことでさらに高い目標が求められる傾向があり、結果として数値目標が過度に積み上がっていく可能性もあるのではないかと感じております。このため、美術館としてどの程度の水準であれば一定の役割を果たしていると評価できるのかといった視点や、数値に依らない評価のあり方についても、あらかじめ整理しておくことが重要ではないかと思っております。先ほど、ロジックモデルに関するワークショップをスタッフの皆さんで実施されたとのことでしたが、こうした取組も踏まえながら、数値だけに依らない評価の考え方についても、美術館として主体的に示していくことが望ましいのではないかと考えております。また、研究紀要についてですが、前回、学芸員の方々の負担

増加を懸念して発言させていただきましたが、適切に運用されれば、調査研究の成果を体系的に蓄積し、発信していく有効な手段になるのではないかと考えております。その際には、収蔵品や企画展に関する研究にとどまらず、学校や教育機関との連携、企業やアートファーマーとの協働など、学芸員の皆さんが独創的な企画に取り組んでおられる点も含めて、八戸市美術館ならではの取組をしっかりと記録・分析し、研究成果として発信していくことが重要ではないかと考えております。

◆委員： まず、館長をはじめ学芸員の皆様におかれましては、これまでのご尽力に心より敬意を表します。美術館が開館してから4年が経過しましたが、当初は手探りの中での運営であったのではないかと拝察いたします。そうした中で、現在は多くの事業に取り組み、これほど充実した内容を積み重ねてこられたことに、大変感慨深いものを感じております。また、美術館として求められる基本的な役割を着実に果たしながら、着実に発展を遂げてこられた点について、非常に頼もしく感じております。社会や市民のニーズは時代とともに変化していくものですが、その変化にしっかりと向き合いながら歩みを進めておられる姿勢に、強い期待を持っております。今後におかれましても、館長を中心に、関係職員の皆様が一丸となって、さらに一步ずつ着実に前進され、より良い取組を積み重ねていかれることを期待しております。

◆委員： まず、去年の地震後、12月21日に来館者数50万人を達成されたとのこと、誠におめでとうございます。これまでの皆様のご努力の賜物であり、大変うれしく思っております。資料3-1の施設維持管理についてお伺いします。約1億7,640万円の中で、ティールーム改修のご説明があり、新しいティールームがオープンするのかなと思いました。美術館には展覧会だけでなく、ティールームやレストランを目的に訪れる方も多いためと思いますので、その点について教えていただければと思います。続いて感想になります。ご説明の中で、アートファーマーのご高齢の方が「デイサービスではなく、美術館に行くのが楽しみ」とお話しされていたことに、大変心を打たれました。100年後の未来に向けた種蒔きが重要である一方で、現在の高齢化社会において、八戸市美術館が人々の生活の中で輝く存在となって欲しいと思っています。今後も、ご高齢の方々がおしゃれをして美術館に足を運び、「今日はここで人と会う」「ここで時間を過ごす」といった、日常の中の特別な場として親しまれていくことを期待しております。美術館が世代を問わず、人と人とがつながる魅力的なコミュニティの場となることを願っております。

○館長： ティールームについてですが、実はこの美術館にはすでに設けられておまして、階段のところにカウンターがある場所を指しています。設計者と協議する中で、その場所を「ティールーム」という名称にしました。現状はシンク、いわゆる流しはあるのですが、営業許可を取得するためには、シンクが二槽であることや手洗い設備の設置など、いくつか不足している設備があります。そうした設備を整備する予定です。ただし、日常的にカフェ営業を行うというのではなく、飲食の販売を含めたイベント利用など、活用の幅を広げることを目的としています。な

お、こうした整備については建築関連法規との関係もありますので、その点は整理しながら進めていきたいと考えています。

◆会長： 各委員から、「アートファーマー」という考え方になぞらえて、5年経ってみて、収穫とか種蒔きの成果とか、風を送り続ける、水を与え続けるといったことの積み重ねで、いろんな栄養がジャイアントルームを中心に広がってきているな、という実感があります。八戸ならではの収穫物も、少しずつ実ってきているのではないかと感じています。貸館業務についても、117件という数字には正直驚いたんですけれども、その中身を見ていくと、バリエーションや多様性が非常に豊かで、美術館という定義自体が広がってきているなという印象があります。いわゆる展示だけではなくて、アートセンター的な機能も含めて、まちなかにある施設ならではの役割を果たしているのかなと思います。アートファーマーのアンケートの中でも、「デイサービスに行くより美術館に来る方がいい」といった声があったのも印象的で、美術館の役割や機能が広がってきていると感じています。それから、熊倉委員や菅野委員のお話にもありましたが、美術館の報告書にとどまらずに、まちづくりの視点も含めた紀要や研究会のようなものを、美術館の一つの柱として位置付けていくことも考えられるのではないかと思います。とはいえ、学芸チームの皆さんもかなりお忙しいと思いますので、大学や学会との連携、あるいは新しい学会を立ち上げるといったことも含めて、今ある大学連携や社会人のネットワーク、美術の先生方のつながりなどから有志を募って、研究会や紀要としてまとめていくプロジェクトを、次の5年くらいをかけて進めていくというのも一つの方向性かなと思います。そういった取組が進めば、八戸市美術館の価値もさらに高まって、それに続くような美術館も全国に広がっていくのではないかと期待しています。最後に、貸館についてですが、落語や健康増進イベントなど、本当にいろいろな使われ方をしていると思う一方で、利用者の決め方について教えていただきたいです。先着なのか、抽選なのか、それとも何か基準を設けて選定されているのか、そのあたりはどのように運用されているのでしょうか。

○事務局： 1年前から応募期間を設定して仮予約申請を受け付けております。仮予約申請が重複した場合には抽選を行っています。仮予約決定後の期間については、先着順で受け付けています。生もの、生花や原木などについては持ち込みはできないなどのルールはありますが、展示内容や活動内容については特に制限を設けておりません。

○館長： 現在、貸館利用を紹介するパンフレットの制作を進めております。一方で、貸館の利用が増えること自体は大変望ましいことではありますが、ジャイアントルームで実施する主催事業と日程や空間が重なる場合もあり、運用上の課題も生じていますので、ジャイアントルームの共有の仕方についても引き続き検討していく必要があると考えております。

◆会長： では、一通り、委員の方から意見をいただきましたけれども、議事、協議事項についてこれで終了いたします。それではお時間も残り少なくなってきました。この辺で、次回の予定などについて、事務局から連絡事項がありましたら、お願

いします。

○館長： お手元に日比野会長の展覧会チラシをお配りしておりますが、会期中は運営協議会を開催する適切なタイミングが難しい状況です。そのため、ぜひ皆様には個別に展覧会をご覧いただければ幸いです。また、関連イベントとしてトークの開催や、オープニングでは日比野会長によるライブペインティングも予定されております。あわせてご参加いただければと思います。さらに、「KAIKONプロジェクト」においては、アートファーマーの皆様が日比野会長の作品について調査する取組も行いますので、こちらもぜひご覧いただきたいと思います。なお、委員の皆様は3月31日をもって満了となります。来年度以降につきましては、個別にご相談させていただきながら、現メンバーとは異なる構成となる可能性もございますが、引き続き運営協議会を継続してまいりたいと考えております。継続してご参画いただく場合はもちろんのこと、そうでない場合におきましても、今後とも美術館の運営に対し、ご助言などを賜れますと幸いです。

○事務局： 委員の皆様、長時間にわたり、ご意見をいただきまして、誠にありがとうございました。それでは、本日の会議はこれで終了とさせていただきます。どうもありがとうございました。